

領域や理論に依らない対人援助職グループの事例

12PSM106 加藤佑里子・12PSM107 狩俣華子・12PSM112 村上 武¹⁾

指導教員 中井あづみ²⁾

1) 明治学院大学大学院心理学研究科 2) 明治学院大学心理学部

I. 問題と目的

日本臨床心理士の倫理綱領は、「職能的資質の向上と自覚」として、「専門的知識や技術、最新の研究、職業倫理等について研鑽を怠らず、専門家としての資質の向上に努めること」を挙げている。2009年に日本臨床心理士会が会員に対して行った意識調査では、会員のほとんどは、会主催の研修会など職場外の研修会・研究会に参加し、約60%は職場外での研修機会に不十分さを感じておらず、約75%が仕事に満足していた。一方、ほぼ同数の約72%が力量不足を感じていた。関連学会などが提供している研修内容の傾向について、日本心理臨床学会と日本臨床心理士の直近2年間の研修会タイトルをホームページから収集し、頻出名詞上位20位を挙げたところ、特定の心理療法や介入対象、アセスメントについての研修機会が多い傾向があった。職場外の研修会・研究会は自主的なグループ活動として行われることもある。では、自主的な研修機会において学ばれることは何であろうか。

そこで、本研究では自主的な学びの例として臨床心理士を中心とした対人援助職のグループ学習を取り上げる。理論やオリエンテーション、援助領域、経験年数が異なるメンバーが集まるセミクローズドグループに焦点を当て、臨床活動全般について、メンバーが何を体験し何を学んでいるのかを探索的に検討することを目的とする。

本研究は、グループでの学びが対人援助職に何をもたらすのかについての示唆を得、対人援助職をめざす学生に卒後の自主学習の一例を提示するという意義を持つと考えられる。

II. 方法

1. 対象グループ

経験年数、勤務領域、オリエンテーションがさまざまなメンバー11名(男性8名、女性3名)による自主的なセミクローズドグループであった。メンバーの臨床経験年数の平均は12.45年(SD=6.11)で、月1度程度の活動を約10年続けており、主な活動内容は文献講読及び情報交換であった。

2. 手続き

半構造化面接用の質問項目を作成するために、先行研究(Lambert, 1992; Corey, 1998; 岩壁・金沢, 2006)を参考にして臨床実践全般で重要と考えられるキーワードを19個得た。大学院生5名がKJ法(川喜田, 1967)を行い、13の質問項目を作成した。その後、「グループが対人援助者として成長させたとすればどこか」「理論や知識の偏りがある時グループをどのように利用しているか」など50分の半構造化面接を実施した。面接場所は、活動場所及び勤務機関であった。協力者には謝礼を渡した。

III. 結果

半構造化面接の内容を協力者の了承を得て録音したデータを逐語化し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA; 戈木クレイグヒル, 2006, 2008, 2010)を用いて分析を行った。原則としてin vivo codeでコーディングを行い、最終的に508の切片化データを収集した。データにラベルを付け、それぞれのラベルにプロパティとディメンションを与え、さらにラベル、プロパティとディメンションを考慮しながらカテゴリ名をつけたところ、最終的に32のカテゴリに分類された。

これらの作業は、データを俯瞰しながら概念化するために質問順、協力者順などにデータを並べ変えながら行なわれ、また複数名で話し合いながら作業を行った。

32のカテゴリを「状況(11カテゴリ)」、「作用/相互作用(13カテゴリ)」、「帰結(8カテゴリ)」の3つのパラダイムに分類し、プロパティとディメンションを参考にストーリーラインを作成した。パラダイムは「」, カテゴリ名は<>, プロパティ名は“”と示した。

IV. 考察

本研究は、対人援助職の自主的なセミクローズドグループからメンバーが何を得ているかについて、全員に半構造化面接を行ってデータを得、GTAを用いて分析した。その結果、「状況」が11、「作用/相互作用」が13、「帰結」が8のカテゴリが抽出され、それらをもとにストーリーラインを

得た。メンバーがグループから何を得ているかという本研究の目的は「作用/相互作用」から「帰結」へのストーリーラインの流れから主に示唆されると考えられる。考察では、3つのパラダイムについてそれぞれ考察し、その後「作用/相互作用」から「帰結」のストーリーラインの流れについて考察する。

「状況」について、メンバーは＜臨床上の行き詰まり要因＞を抱え、＜新たなグループでの学びの場の必要性＞を感じ、＜グループだからこそできる学び＞として文献講読とケース検討を選び、グループへの参加を考えていた。＜勧誘を受け＞、＜不可欠ではない中間地点としてのグループ＞に参加したが、そこは＜似ていると同時に異なる臨床家の集まり＞であったと考えられる。

「作用/相互作用」について、メンバーは文献講読や情報交換といった限定された取り組みの中で、多様な「作用/相互作用」を行っていることが示唆された。「作用/相互作用」は、＜情報交換と刺激の与え合い＞、＜直接・間接のピアグループスーパービジョン＞、＜自分の偏りに気づく刺激＞などの臨床情報の知的交換と、＜精神的支え合い＞、＜受け入れ合うゆとりを持つ居心地の良いグループ＞などグループの雰囲気への共感に大別された。また、＜グループには話さない話題＞もあり、話題を選択していることが示唆された。

「帰結」について、メンバー全員が＜臨床業務に欠かせない諸要因の深化＞につながったと考えていた。＜自己理解の深化とCL理解の深化とのつながり＞や＜グループとグループ外の他者理解の深化＞といったグループ外の関係理解につながっていると考えられる。＜グループがどう役立つかわからない＞と考える一方で、＜グループがもたらす精神的支え＞を介して＜グループに居続けることで居続ける大事さを学ぶ＞側面もあることが示唆された。

「作用/相互作用」から「帰結」へのストーリーラインの流れについて、＜直接・間接のピアスーパービジョン＞は“主な問題が技法”の場合は＜グループがどう役立つかわからない＞と感じる一方、“気軽”に“別の見方からのアドバイス”

を受けられる“類似ケース”では＜臨床業務に欠かせない諸要因の深化＞や＜自己理解の深化とCL理解の深化のつながり＞をもたらしていると考えられる。また、＜情報交換と刺激の与え合い＞は＜臨床家としての視野の広がり＞や＜グループとグループ外の他者理解の深化＞につながっていることが示唆された。

以上のことから、メンバーは、文献講読と情報交換という表面的には限定された取り組みの中で、多様な知的・感情的交換を行っており、それが、臨床全般や自他への気づきを深め、広げていることが示唆された。

今後の課題として、グループが役立たない側面についての詳細な検討をすると、新たなカテゴリが得られる可能性が考えられる。また、本研究の考察は、より多くの対象者からデータが収集されたカテゴリを中心に考察を行ったが、詳細に流れを見ていくことで、よりグループへの理解を深めることができると考えられる。